

スウェーデンにおける知的障害者を対象とした妊娠・ 出産・子育てのためのわかりやすい教材と活用 —スウェーデン、ウプサラ市での現地調査報告—

藤澤和子*¹ 杉浦絹子*²

要 約

本稿では、2018年9月にスウェーデンの知的障害者の妊娠、出産、子育て支援の教材開発や研究を中心的に担うウプサラ市にある Samverkan Utveckling Föräldraskap (SUF) -Kunskapscentrum を訪問して得た知見として、知的能力に配慮してわかりやすい表現で制作された当事者向け教材や冊子、それらの使用方法、同地域にある特別支援学校、ケアセンターとの連携について報告した。日本でも、WEB等によって当事者、家族、支援者、そして、直接関係のない人々にも支援の必要性を知らせ、地域でのサービスや教材を普及させていくことが必要である。

1. 緒言

スウェーデンでは、1960年代に提唱されたノーマライゼーションの考え方に基づいて、障害があっても、すべての人が情報を平等に得ることは、民主主義や正義、平等思想を実現するために重要な課題という認識にたち、現在まで継続して、知的障害のある人が理解できるニュースや図書を発信出版する活動が実施されてきた。図書は、スウェーデン語の Lättläst を省略した LLブックという名称と呼ばれ、日本語の「やさしく読める本」という意味である¹⁾。知的障害や自閉症、読み書き障害などの障害や高齢者、移住により居住する国と母語が違うなどの理由で、一般の書籍を読むことが難しい人たちに、読書の楽しみや必要な情報を与えるために、生活年齢の興味や関心に合う内容が、わかりやすく読みやすく書かれた本である。

LL ニュースは、8 SIDOR (8ページ)²⁾ と呼ばれ、毎日のニュースが、わかりやすい文や写真を使って WEB で配信され、音声での読み上げもできる。また、印刷物としても発行されており、購読できる。

このように平等に情報や読書保障をするという社会的背景のもとに、教育や福祉、医療のさまざまな分野で知的障害者自身が理解して使用できる教材や

図書、冊子、動画やアプリの開発が盛んである。

2018年9月に知的障害者の妊娠、出産、子育て支援の教材や図書等についてスウェーデンの状況を調査する機会を得た。本稿では、中心的にスウェーデンの研究や教材開発を担っているウプサラ市にある Samverkan Utveckling Föräldraskap (以下 SUF と記す) Kunskapscentrum³⁾ と、同地域にある特別支援学校、ケアセンターを訪問して、知的能力に配慮した教材や冊子等、それらの使用方法について担当者へのインタビュー調査を行ったので報告する。

2. 結果

2.1 SUF-Kunskapscentrum の指針

SUF-Kunskapscentrum は、コラボレーション (連携)・開発・子育てのサポート情報センターという意味である。ウプサラ市にあり、1999年から知的障害、Attention-deficit hyperactivity disorder (ADHD)、自閉症スペクトラム、後天性脳損傷、または子育て能力に影響を与える精神障害を抱えている人の妊娠、出産、子育て支援と、そのような親をもつ子どもや家族への支援に関する知識を収集して有効な支援方法を考え、教材を開発し、支援を広めるための普及活動を行っている。直接障害者に関

*1 新潟リハビリテーション大学大学院

*2 名古屋女子大学

(連絡先) 藤澤和子 〒958-0053 新潟県村上市上の山2-16 新潟リハビリテーション大学大学院

E-mail: kminami339@gmail.com

わって支援をする組織ではなく、主に知的障害をもつ親やその家族に会って支援する専門家を対象に年数回セミナーを開いたり、親、子ども、学生、研究者のための情報を提供するセンターとして機能している。そして、各市にSUFグループがあり、それらがSUFサポート情報センターの土台を構成している。グループは、母性医療や小児医療、保育園、特殊学校、学校、リハビリテーション、福祉や厚生社会サービス、家族施設や児童施設、児童や成人の精神科等の様々な活動分野の専門家が所属しており、各グループにおける構成メンバー数は大体8人～14人である。支援が必要な対象者に対する活動計画を立てて支援者へ助言をしたり、知的障害をもつ親の周囲にいる人たちの教育支援等を行なっている。⁴⁾

2008年にウプサラ県で、知的障害、ADHD、自閉症スペクトラム等の診断名をもつ親と診断名はついていないが日常生活への対処が困難であり、学習困難や子育て能力に欠陥がある親の人数についての実態調査が実施された。その結果、600家族であることが明らかになった。また、これらの家族には、合わせて1092人の子どもがいた。これはウプサラ県の0歳から18歳のすべての子どもたちの約1%にあたるものだった。この調査によって、障害のある親に育てられている子どもたちの人数が判明し、子どもたちのために家族や周囲の人たちに行っているSUFの支援活動の重要性が再認識された。

スウェーデンの知的障害のある親の育児支援の考えは、主にParenting Young Children(省略のPYCを使用)の方法を参考にして行われている。PYCは、オーストラリアのメルボルンのParenting Research Centre⁵⁾で、Robyn Mildon博士とCatherine Wade博士によって起草された。2010年にスウェーデンに導入され、2011年から2014年にかけて、Gothenburg大学のMikaela Starke博士を中心に、ソーシャルワーク部門、ソーシャルワークの研究開発センターLinköpingと支援地域ウプサラ等の協力を得てPYCをスウェーデンに適応させるための開発プロジェクトが実施されてきた⁶⁾。現在までに約30のスウェーデンの自治体でテストされて約450人の専門家がPYCスーパーバイザーとして訓練を受けて成果をあげている。

知的障害者は出産しても、子育てができずに我が子を里子に出さざるを得ない状況になってしまうケースが多いことから、知的障害を持つ親が子育ての方法や自信を養うのを支援する教育プログラムである。学習する技能には、摂食、睡眠、安全などの基本的な育児、親子関係が含まれた家庭での集中的

な親教育プログラムであり、毎週のセッションを中心に構成されている⁵⁾。

2.2 SUF Region Uppsalaの活動

ウプサラ市は、スウェーデン中部のウプサラ県の県都であり、スウェーデン第4位の都市である。訪問したSUF-KunskapscentrumであるSUF Region Uppsalaは、ウプサラ県とウプサラ市が共同出資する公的組織であり、スウェーデンのリハビリテーション、医療、社会福祉課、心理職等と協同して知的障害者の支援にあたっている。主なスタッフは、社会学、認知行動学、心理学、作業療法等で構成されており、ウプサラ大学の障害研究センターとも連携をとって研究や教材開発、実践者のトレーニングのための講習会や学際的な会議などを行っている。スタッフのLydiaは、多機関、多職種で連携して支援することが大変重要だと述べている。また、支援対象となる知的障害の程度については、重度から軽度まで幅広く支援していこうという姿勢がうかがえた。

親になることについて知的障害者が考えるための教材や出産の準備のための教材、妊娠から出産、新生児の育児のやり方がわかる冊子等、知的障害者が理解できるように制作された情報提供のための教材や冊子の開発が盛んである。そして、現在は、子どもを産むか産まないかを自分で判断できるための教育的支援と教材開発と配信に力点が置かれ、特別支援学校やケアセンターとの連携に努められている。ここでは、「TOOLKIT」という新しく開発された教材を使った教育的支援や、特別支援学校とケアセンターとの連携、さまざまな教材や冊子について報告する。

2.3 「TOOLKIT」の開発と出産への自己決定支援

TOOLKITは子育てによる自分の生活の変化などを具体的に疑似体験させて、子どもをもつことや育てることが自分の人生にどういふ変化をもたらすのかを考えさせる教材である。知的障害者は論理的思考、問題解決、計画、抽象的思考、判断、記憶等の全般的な精神機能に支障があると特徴づけられるため「もし、こうだったら」という仮定のできごとを想定して仮説を検証するために論理的に思考を進めることが難しい。「もし子どもができたらどのように子育てをするのか、自分の生活がどのようになるのか」という問題を頭の中で仮定してイメージすることは困難な人が多い。赤ちゃんはかわいいという直感的な感情に影響を受けて行動する傾向にあると考えられる。このような未経験のできごとをイメージすることに比べて、経験した具体的なエピソードについての記憶や理解は良好であるため、経験から

実感できる具体的な思考過程をたどる必要がある。TOOLKITはこのような知的障害者の特性を考慮した優れた教材である。

教材の内容は、大きさと重量が実物と同じで本物の赤ちゃんのように動作するベビーシミュレーター、哺乳瓶やおむつなどの育児用品、赤ちゃんを育てることによって変化する生活費の表、お母さんやお父さんになったときの生活時間表、子どもが1歳、2歳と成長する様子を知り、その時々親は何をするのかを考える養育表である。ベビーシミュレーターの内部にはコンピューターが入っていて、食べさせたり、おむつを替えたりできるようになっている。

教材は、赤ちゃんが生まれた後の生活を疑似体験するために使用する。期間は4日以上体験することを求められる。毎日、お乳をあげる、おむつをかえる、入浴させる、寝かせる、寝ずに泣いたときの対応や睡眠時間の状態等も入れてスケジュールを立てて、ベビーシミュレーターを使ってその通りに体験する。安全なお風呂の入れ方、お乳のあげ方を学び、生活や学習または仕事に費やす時間、趣味に使える時間などを計算する。生活費の記録は、育児にかかる費用を、おむつ、赤ちゃん用の入浴剤、衣服、お乳代、健診などでかかる交通費等、細かに計算する。そして、生まれる前と比較して変化を知る。体験の後、子どもを産んで育てることについての考えや思いを話し合い、自分はどうかを考えていく。

2.4 特別支援学校との連携

特別支援学校の高等部の学生を主な対象として、「TOOLKIT」という教材を使い「もしも子どもが生まれたら」ということを体験的に考えさせることによって、子どもを産み育てることを自分で判断できる能力を養い、妊娠した場合は、どこで支援を受けられるかなどの情報を与えるための実践的取り組みが、SUF Region Uppsalaと協同で行われている。

近郊の特別支援学校を訪問して、教員に指導の様子や有効性などをうかがったところ、自分の時間がほとんどないことや、お金がかかり自由に使えるお金が少なくなってしまうこと、赤ちゃんの世話が大変なことなどが、感想として出るということだった。学習前の赤ちゃんがかわいいので産みたいという意見はなくなると言われていた。教員たちは、生徒に対して、赤ちゃんを産むかどうかを自分で判断する大切さと、妊娠した場合は、どこで支援を受けられるかなどの情報を知って必ず連絡することを伝えているということだった。

この実践による成果は、すぐに反映するものではないが、SUFは十数校の特別支援学校の生徒たち

の反応を取集中で、調査結果をまとめるということである。

2.5 ケアセンターとの連携

はじめに、ケアセンターという組織を説明する。市や町に設置されており、その数は市や町の大きさによる。ウプサラの場合、20ヶ所以上ある。出産前の妊婦や小児ケア、健康検査や予防注射などを担当している。

訪問したのはサマリータヘム病院にあるケアセンターで、助産師として30年ほど勤務しているKaterinaにインタビューをした。彼女は次のように語った。

「知的障害のある人の妊婦は年に1, 2人、指導する。本人向けにSUFの教材を使っている。大学の助産師養成のカリキュラムには知的障害者へのケアも入っており、SUFの教材が学生の教育用としても使われている。印刷物や動画があるので、知的障害者といっしょに読んだり、動画を見たりして、出産や新生児の育て方を説明する。もっと支援が要るときは、ウプサラのSUFに直接コンタクトをとってアドバイスをもらっている。知的障害のある妊婦には何度も同じことを短時間にくりかえして教えるようにしている。

助産師は、出産前から出産後の母乳の飲ませ方等を教えて、出産後の小児科の看護師につないでいく。今まで困ったケースは、妊娠したが、何の助けも要らない、自分たちでできると考えている人だった。社会福祉課に連絡をとって支援してもらった。」

2.6 教材・冊子

SUFで開発されている教材や冊子、動画は、ホームページ³⁾からダウンロードできるようになっている。ホームページに沿って紹介する。

図1はホームページのフロントページである(図1)。組織の説明、SUFは認知障害^{†1)}の人たちが親になるサポートを行うという目的、教材、工事中の研究等項目から成っている。また、スタッフによる挨拶と組織を説明する動画と講座の案内がある。こ



図1 Region Uppsala SUF-Kunskapscentrum³⁾

の4つの項目から入ると、それぞれに説明がある。

教材の項目を開いていく。「印刷用素材」と「知能やコミュニケーションのサポート用」「動画」に分かれている。

2.6.1 印刷用素材

4項目で構成されており、それぞれの時期に必要な情報がわかりやすく書かれた冊子やパンフレットとして提供されている。

- ① Informerat val om eventuellt föräldraskap (子育てについての情報による出産するかどうかの選択)

『Till dig som funderar på att bli förälder』(親になることを考えているあなたへ)

親になりたい人に、ベビーシミュレーターを使ってみることや TOOLKIT で模擬体験をすることを進めている。

『Babysimulator』(ベビーシミュレーター)

ベビーシミュレーターを使用して小さな子供の世話をすることの意味と体験する方法について簡単に説明している。

『Information om preventivmedel』(避妊について)

数種類の避妊の方法について絵を使って具体的に説明している。

- ② Förberedande föräldraskap under graviditet (妊娠中の子育てへの準備)

『Att bli förälder och ha kognitiva svårigheter』(認知障害を持つ人が親になる)

「認知障害をもつ人が親になるということは周りからの特別なサポートを必要とする、出産前には多くの準備が必要だし、出産後も同様である」とサポートを受ける必要性を述べている。

『VÄNTA OCH FÖDA BARN SAMT SKÖTA OM SITT BARN DEN FÖRSTA TIDEN』

(初めての子育てと親になるためのパンフレット)

ウプサラ大学と共同で制作された妊娠出産新生児の育児のためのわかりやすく書かれた手引書で、スウェーデン語とアラビア語で書かれた2種類が出版されている(図2)。近年、中東からの移民が増えている影響で、彼らにも読める本や冊子などが必要とされている現状に対応した本である。写真と絵を多く使い、短い文で書かれている90ページの冊子である。

- ③ Föräldraskap i familjen (家族で子育て)

『Till dig som är förälder』(認知障害をもつ親であるあなたへ)

「認知困難とは思い出すこと、考えること、時間にそって計画したり、処理したりすることが時には困難となる。もしあなたが親になるのなら、出産後のサポートを必要とする。」と説明している。

『Stöd och hjälp』(サポート及びヘルプ)

「サポートやヘルプを受けることが、子どもにとっても必要であり、子どもを安心させる。例えば、助産師、医者、小児ケアセンター、社会サービスやハビリテーションで働く職員からのサポートやヘルプを受けられる。」と助言している。

- ④ Föräldraskap när barnet är i samhällsvård (子どもが地域ケアを受けているときの子育て)

『Till dig som arbetar inom socialtjänsten eller är familjehem』(社会サービスあるいは家庭を提供する分野^{†2)}で働いているあなたへ)

子どもは、親と家庭を提供する家族がより良く接することで安心する。認知障害をもつ親が社会サービスや家庭を提供する人たちにどのようなことを期待しているかを説明している。

- 2.6.2 知能やコミュニケーションのサポート用文字や話し言葉の使用に困難のある人に向けた教



図2 「VÄNTA OCH FÖDA BARN SAMT SKÖTA OM SITT BARN DEN FÖRSTA TIDEN」³⁾
(左スウェーデン語、右アラビア語)

材である。Bildstöd - Förlossning(画像によるサポート, 出産)(図3)は, 出産の分娩の予想を線で表す図, Bildstöd - Föda barn(画像によるサポート, 出産する)(図4)は, ピクトグラムと文字を使って, 出産のための準備や病院へ着いてから出産までに何があるのかを細かく表す冊子である。発達障害者は, 見通しがもてない特性があり, とくに初めてのことは対応できずにパニックになる人がいるため, 自分の状態が出産までのどこなのかを線上に印を入れて視覚的に示すことができる出産分娩予定や, 出産まで何を準備して何があるのかをピクトグラムでわかりやすく書いた冊子は有効だと考えられる。

2.6.3 動画

『Göra skillnad』(違いをつくりだせ)という知的障害をもつ本人と彼らの子どもの語りと, 絵本を読

み聞かせる動画が提供されている。

『違いをつくりだせ』は, 4人の知的障害のある親が, 一人ずつ登場し, 家族構成や自分の障害, できるところと苦手なこと, 必要としている支援, 支援によってそれまでとの違いができたことについて語っている。一人目のパニツラという人の話を紹介する(表1)。

2つ目は, 子どもの目線で, 親が知的障害を抱えているときに日常生活がどのように見えるか, 親が心配だと感じた場合にどうすればいいかについて制作された絵本を動画で読み聞かせている。『LINUS MAMMA HAR EN UTVECKLINGSSTÖRNING』⁷⁾(リーヌスの母親は知的障害者です), 『Wilmas mamma har ADHD』⁸⁾(ウィルマのお母さんはADHDを持っています)の2冊は本も動画も利用で

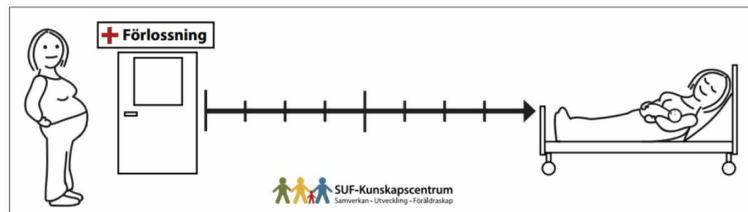


図3 Bildstöd - Förlossning (画像によるサポートー出産)³⁾

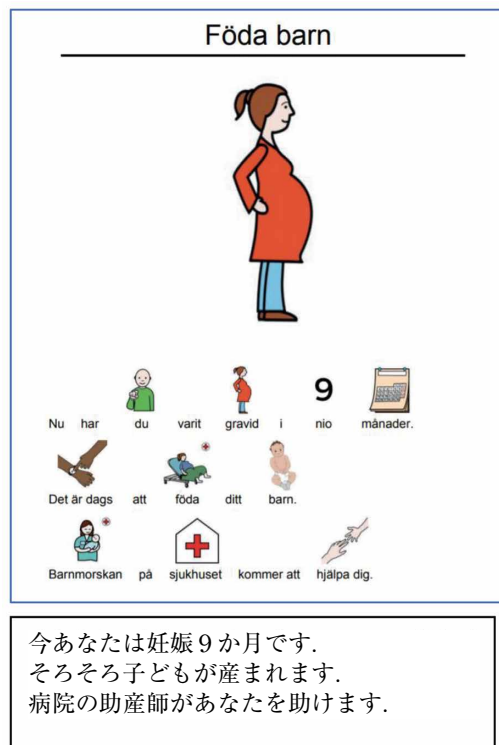


図4 Bildstöd - Föda barn (画像によるサポートー出産する)³⁾

表1 「Göra skillnad」(違いをつくりだせ)

私には夫と子どもが二人いて、軽い知的障害を持ち、字を読むことができません。また医者へ電話するときには自動的な応答で、1のボタンを押せとか、2のボタンを押せとか言われると、どう解釈していいのかわからなくなる。ましてやコンピューターでWWW.云々と聞くと、もうどうしていいのかわからなくなる。でもお金の分配や仕分けには自信があり、子どもたちに対しても学校や学童保育で子どもたちがどのように感じているのかとか、何が起きているのかといったことに対しては敏感である。

私が必要としているのは、掃除のヘルプである。掃除を手伝ってくれる人や連絡窓口になっている人がいて、お金の支払いや銀行関係や役所からの公文書を理解できるように手助けしてくれている。私は子どもと関われる時間が増えたので助かっている。

出展 SUF-Kunskapscentrum Material Film

表2 「LINUS MAMMA HAR EN UTVECKLINGSSTÖRNING」(リーヌスの母親は知的障害者です)⁷⁾

リーヌスは8歳で、母と一緒にアパートを借りて住んでいます。
母は猫が大好きで、四匹ほど飼っています。
父は他の街に住んでいます。
小学校2年生のリーヌスは、毎日学校へ通っています。

リーヌスは学校で学ぶことが好きです。
でも学校へ行く朝が、大変慌ただしいです。
母は時間に間に合うように準備することが苦手です。
焦って怒ったり慌てたりすると、リーヌスは思っています。
こんなときに母に何かを尋ねたりするのは良くありません。

リーヌスの母へ社会福祉事務所から電話がかかってきました。
母は怒って恐怖や悲しみを感じています。
自分ではできる限り精一杯やっているのに、一体どうなるのかしら？

数日たった頃、社会事務所から二人の女性が訪れてきました。
カーリンが週に何度か家へ来るようになりました。
カーリンはキッチンにステッカーを貼ったスケジュール表を掲げました。
これで何曜日が体育かを見ることが出来ます。リーヌスは良い方法だと思います。
母は今、前より幸せで落ち着いています。
カーリンは家の中をさらに秩序正しく整理して、時間をチェックするためにどのようにしたらいいのかを示し、母と一緒に訓練をしました。
リーヌスは母が知的障害と呼ばれる何かを持っていることを知りました。
脳の働きが少し異なっているのです。
でも簡単な説明があったり、少し時間をかけることでできることが増えます。
「母さん、朝今までのように怒らないし、慌てなくて済むのは気持ちがいいね」と、ある日カーリンが帰った後で、リーヌスが言いました。
母は微笑んで、リーヌスの髪の毛をくしゃくしゃとなでました。

一部翻訳

きるようになっている。どちらの作品も、障害をもつ母親と障害のない子どもの日常生活が絵と読みやすいテキストで書かれている。子どもから見た母親の様子や自分たちの生活で困ったこと、支援を受けて生活がよくなるというお話である。知的障害のあ

る人が母親になって子育てすることの難しさと支援を受ける大切さを感じ取れる。『LINUS MAMMA HAR EN UTVECKLINGSSTÖRNING』の一部を紹介する(表2)。

3. 考察

スウェーデンの知的障害者の妊娠・出産・子育て支援を中心に担うSUF Region Uppsalaの活動や教材について報告した。

1960年代以降、知的障害のある本人が理解できる情報を提供し、自己判断や自己決定を重視してきた社会の動向が、教材開発に明確に表れていた。子どもを産むことを自分で考えて決定することを援助する教材、妊娠の身体や出産育児の方法を知るための教材、障害特性に合わせて理解しやすく配慮された提供方法、これらはすべて受け身的ではなく自分で考えて実行できる主体的な存在になることを奨励している。そして、このような教材がWEBでダウンロードしてだれにでも無料で活用できるようにされていることや実際に特別支援学校やディセンターの現場で活用されていることがわかった。本人、家族、支援する関係者が同じように教材を手に入れることができるので、お互いに、これらを媒介して共通に理解しやすい状況にあると考えられる。

教材の内容としては、親になることの現実を知ったうえで自己決定すること、知的障害があると子育てには支援が要するという現実を知らせて支援を受けようという呼びかけ、妊娠、出産、子育ての具体的な様子と方法の教授、社会的にケアに携わる人が配慮すること等が書かれており、産むまでと産んでからどう考え、どうすればいいかが、本人、家族、支援者によくわかるように分類されている。とりわけ子育てを支援するだけではなく、TOOLKITの開発と実践にあるように、産むかどうかを自分で考え判断できる力をつける自己決定支援が含まれていると

ころが、特徴的だと考える。また、絵本と動画によって知的障害のある親をもつ子どもの気持ちや生活、家庭への支援の必要性について配信されており、学校教育に関係する人たちにも、育てられる立場の子どもへの理解を促す配慮が示されていた。

教材の用途も自閉症の認知特性に適應するための本人向けのものから、支援者といっしょに読んで学ぶ冊子まで、目的と表現方法に幅があった。そして、本人が出て語る動画は、支援が生活をよくするという現実を知らせるためにとても説得力があると考えられる。また、LLブックの制作で重要視されている文字が読めない人には音声で聞かせるという手法は、本の動画に使われていた。移民が増えたという社会的ニーズによって、同タイトルのLLブックがスウェーデン語とアラビア語の2か国語で出版されている⁹⁾ 配慮も、教材に活かされていた。

WEBで公開されることは、対象となる当事者や支援者はもちろん、直接関係のない大勢の市民への情報提供である。知的障害者の出産や子育て、その子どもや家族の課題を知らせるとともに、支援をしようというメッセージの発信でもあり、国民の問題として考えるきっかけを作る大きな意味があると考えられる。日本では、現在SUF-Kunskapscentrumのような公的機関はなく、知的障害者の結婚や子育てを支援しようという活動は、少数の社会福祉法人等に留まっている。今後は、WEB等によって当事者、家族、支援者、そして、直接関係のない人々にも支援の必要性を知らせ、地域でのサービスや教材を普及させていくことが必要だと考える。

謝 辞

本調査にご協力くださった皆様に深く感謝申し上げます。スウェーデン語の翻訳にご協力いただいた寺尾三郎氏に心から感謝申し上げます。

本調査は科学研究費助成事業 基盤研究 C17 K12330 の助成を受けて実施しました。本稿の内容に関する利益相反事項はありません。

注

- †1) SUF-Kunskapscentrumの支援する対象は、知的障害、ADHA、自閉症スペクトラム、後天性脳損傷、または子育て能力に影響を与える精神障害を抱えている人であるため、それらの障害を含めて認知障害と言う。
- †2) 社会サービス分野とは、社会福祉事務所で働く公務員で、家庭を提供する分野とは一般人が申請して、認められた家庭である。一般人の家庭が何らかの事情で見られない子供を長期にわたって育てる。市の管理下にあり、代償として市からお金が支給される。

文 献

- 1) 藤澤和子、服部敦司編著：LLブックを届ける—やさしく読める本を知的障害・自閉症のある読者へ—。読書工房、東京、2009。
- 2) 8 Sidor : *Lättlästa nyheter*. <https://8sidor.se/>, [2020]. (2020.9.1確認)

- 3) Region Uppsala SUF-Kunskapscentrum : *Om SUF-Kunskapscentrum*. [https:// regionuppsala.se /suf-kunskapscentrum](https://regionuppsala.se/suf-kunskapscentrum), [2020]. (2020.9.1確認)
- 4) SUF Region Uppsala : *SUF-Kunskapscentrum Smverkan-Utveckling-Föräldraskap*, SUF Region Uppsala, Uppsala, 2016.
- 5) Parenting Research Centre : *Building Future of Australian*. <https://www.parentingrc.org.au/>, [2020] (2020.9.1確認)
- 6) Starke M, Wade C and Feldman MA : Parenting with disabilities: Experiences from implementing a parenting support program in Sweden. *Journal of Intellectual Disabilities*, 17(2), 145-156, 2013.
- 7) Melander S, Springer L and Stolpe L : *Linus mamma har en utvecklingsstörning*. Region Uppsala, Uppsala, 2013.
- 8) Melander S, Springer L and Stolpe L : *Wilmas mamma har adhd*. Region Uppsala, Uppsala, 2018.
- 9) 藤澤和子編著 : 公共図書館でできる知的障害者への合理的配慮. 樹村房, 東京, 2019.

(令和2年11月18日受理)

Easy-to-read Educational Materials on Pregnancy, Childbirth, and Child-rearing for People with Intellectual Disabilities in Sweden

Kazuko FUJISAWA and Kinuko SUGIURA

(Accepted Nov. 18, 2020)

Key words : easy-to-read educational materials, people with intellectual disabilities, perinatal care, Sweden

Abstract

This paper presents findings from a field investigation of Samverkan Utveckling Föräldraskap (SUF)-Kunskapscentrum, a knowledge center located in Uppsala, Sweden that develops educational materials and conducts research to support people with intellectual disabilities during pregnancy, childbirth, and child-rearing, conducted in September 2018. The authors describe the contents of educational materials and pamphlets produced in an easy-to-read style in consideration of intellectual disabilities and the state of using such materials. Cooperation between the center and special schools in the area is also reported. In Japan, it is necessary to disseminate information regarding the need of support for people with intellectual disabilities to not only people with intellectual disabilities, their families, and supporters, but also people indirectly related, over the Internet and through other means, and to distribute services and educational materials widely in the community.

Correspondence to : Kazuko FUJISAWA

Niigata University of Rehabilitation
Murakami, 958-0053, Japan
E-mail : kminami339@gmail.com

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.30, No.2, 2021 685 – 692)